

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01977

研究課題名（和文）世代間ケアに関する意識変化の解明：複数データの二次分析に基づく検証

研究課題名（英文）Analysis of Secondary Data

研究代表者

中西 泰子（Nakanishi, Yasuko）

相模女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：50571650

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、世代間ケア（高齢者ケア及び子育て）に関する意識の時系列的趨勢を明らかにするとともに、当該意識の現代的な位置づけを示すことであった。

上記の目的に沿い、まずは「日本人の意識」調査 1973 年～2013 年の累積データを元に、家族意識の時系列変化について分析を行った。その結果、地域（都市区分）によって、時代やコーホートの影響が異なることなどが明らかとなった。また、全国家族調査（NFRJ）を用いて世代間関係および夫婦関係に関する意識や実態について分析・報告を行った。研究全体をとおして、長期的な家族意識変化の内実が確認されたほか、地域変数を含めて意識変化を把握する必要性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族意識は、戦後もっとも変化した社会意識といわれる。しかしその変化の詳細はまだ明らかになっていない。本研究では、1973年～2013年の「日本人の意識」調査の累積データについて、年齢・出生コーホート・時代（調査時点）のそれぞれの影響を識別して把握する解析方法を用いて分析・検討を行った。その結果、特定コーホートの影響が大きいことや、都市規模など地域区分によってその影響が異なることが確認された。これらの結果から、地域ごとの家族意識の変化のプロセスを把握していくことの必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to clarify the time series trend of attitudes on intergenerational care (for the elderly and child) and show the current status of that conciseness.

Following those aims, we analyzed the cumulative data of “the Survey on Japanese Value Orientations”, 1973-2013 to reveal the time series trend of family consciousness. The results of the analysis show that the effects of age and cohort are different depending on areas (classified by the population size). Additionally, we analyzed and made a report on the attitudes and the actual conditions of intergenerational and conjugal relationships by using the National Family Research of Japan (NFRJ) 18. Overall, we verified the reality of long-time series trends of family consciousness and confirmed the necessity of focusing on the characteristics of the residential area to grasp the time-series changes in attitudes.

研究分野：家族社会学

キーワード：家族意識 世代間関係 性別分業 二次分析 時系列変化

1. 研究開始当初の背景

社会学では、価値規範の多様化など社会意識の変容を前提に様々な理論的な議論がなされてきたが、社会意識の長期的変容についての実証的な研究は、実はほとんどなされていないと指摘されている(太郎丸 2016)。このことは、世代間ケアを含む家族意識においても例外ではなく、家族の多様化、個別化が議論の前提とされることが多いが、家族意識の変容やその背景について詳細な実証的検討がなされているとは言い難い。

家族の多様化、個別化が主張される中においても、「依存的な他者」のケア(高齢者ケアや子育て等)は、実質的に家族責任となる部分が大きく、多くの家族がケアに関する困難を抱えている。そのため、世代間ケアに関する人々の意識の把握は、「家族」とは何か、さらには個人・家族・国家の結びつきはどのようなものであるかについて議論する際に不可欠であるといえる。先述のように、社会意識の変容については、実証的な検討がほとんどなされないまま、理論的な仮説を前提とした議論が展開されてきた。

しかし近年になり、日本においても複数の全国レベルでの継続調査が積み重ねられ、またそうした調査の個票データが公開され二次分析が可能となってきた。さらに時系列データを適切に扱うための統計手法(例えばマルチレベル分析を応用した APC (age-period-cohort) 分析)の手法や実行可能な統計ソフトの開発も進んでおり、日本でも 2010 年以降、価値意識や家族意識の変容について詳細な実証的研究が複数現れてきた。

そして、意識の変容を捉えるにあたって、その背景となる実態との関連も重要視されている。例えば、家族に関する全国レベルの時系列調査である全国家族調査(NFRJ)の研究では、家族の意識における変化(変動・多様化)/不変化(安定・再生産)と実態における変化/不変化を組み合わせた 4 区分によって、家族の変容を記述・評価するモデルを提示している(稲葉他 2016)。

これらの背景をふまえ、本研究では世代間ケアに関する意識を中心に家族意識が、なぜ、どのように変容してきたのかを示すことを目的として研究を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、世代間ケアに関する意識を中心に家族意識の時系列的趨勢と現代的位置づけを明らかにすることであった。具体的には、以下の 2 つのアプローチから、世代間ケアに関する意識がなぜ、どのようにして変容してきたのかを実証的に解明することを目指した。

①時代・世代・年齢(加齢)の影響を識別することで世代間ケアに関する意識の変容の内実を明らかにするとともに、社会的背景として産業化や人口構造・世帯構成の変化等が意識の変容に及ぼす影響を統計的に検証し、明らかにする。②世代間ケアに関する「実態」の変容についても統計的分析を行い、意識の背景にある実態との関連から世代間ケア意識の変容の意味を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、複数の全国データの二次分析を行って、まず家族意識の変容について、時代・世代・年齢(加齢)の影響を識別することが可能な APC 分析を用いた統計的検証を行った。さらに、家族意識の変化を実態との関連を含めて考察するために、世代間関係や夫婦関係に関する現状についても全国データ(全国家族調査(NFRJ))を用いた統計的検証を行った。

4. 研究成果

本研究の目的は、世代間ケア(高齢者ケア及び子育て)に関する意識の時系列的趨勢を明らかにするとともに、当該意識の現代的位置づけを示すことであった。そのために、複数の全国データの二次分析を行い、当該意識の変容の内実を把握した上で、「実態」の変化との関連から意識の変容の持つ意味を解明すべく研究を行ってきた。

上記の目的に沿い、まずは「日本人の意識」調査 1973 年～2013 年の累積データを元に、家族意識の時系列変化について分析を行った。2020 年度は、それ以前の分析をさらにすすめて、地域(都市区分)によって、時代やコーホートの影響が異なるのではないかという仮説に基づいて分析を行い、その結果を第 69 回数理社会学会大会にて報告(「女性の就労に関する意識変化と地域差:「日本人の意識」調査を用いて」)を行った。具体的には、男女ともに団塊世代がその前後の世代よりも家庭と仕事との両立意識が強いことや、時点をおうごとに、また男女ともに都市規模が大きい方が両立意識が強いことなどについて報告を行った。両立意識の変化の把握においては、地域ごとの変化のありようを確認する必要性が示唆された。地域の産業構造や就労率などの指標を地域レベルの指標として分析に含めることで、地域の影響について検討することで、考察を深めていくことが可能と考えた。2021 年度は、それ以前からの分析をさらに進めることに加えて、第 4 回全国家族調査(NFRJ18)を用いて世代間関係および夫婦関係に関する意識や実態について分析を行い、報告や論文執筆を行った。

2021 年度の研究成果は、学会報告 1 本と報告書論文 2 本である。学会報告は、「介護役割意識

の回答パターンと関連要因 潜在クラス分析による検討 (日本家族社会学会第31回大会)。
報告書論文は第4回全国家族調査(NFRJ18)第2次報告書 第2巻 西村純子・田中慶子(編)『親子関係・世代間関係』掲載の「介護役割意識の回答パターンと関連要因 潜在クラス分析による検討」(中西)と、第4回全国家族調査(NFRJ18)第2次報告書 第1巻 松田茂樹・筒井淳也(編)『夫婦関係』掲載の「夫の家事・子育てが夫の夫婦関係満足度にもたらす意味の変容 「家計の共同性」と「家庭の共同性」のバランスに着目して」(鈴木)の2本である。研究全体をとおして、長期的な家族意識変化の内実が確認されたほか、地域変数を含めて意識変化を把握する必要性が確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 施利平	4. 巻 35
2. 論文標題 後継者の獲得をめぐる世代間の交渉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較家族史研究	6. 最初と最後の頁 99-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中西泰子	4. 巻 2
2. 論文標題 介護役割意識の回答パターンと関連要因 潜在クラス分析による検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第4回全国家族調査（NFRJ18）第2次報告書	6. 最初と最後の頁 106-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木富美子	4. 巻 1
2. 論文標題 夫の家事・子育てが夫の夫婦関係満足度にもたらす意味の変容 「家計の共同性」と「家庭の共同性」のバランスに着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第4回全国家族調査（NFRJ18）第2次報告書	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 施利平	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 中国における都市化と世代間関係の変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族社会学研究	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4234/jjoffamilysociology.30.31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中西泰子
2. 発表標題 介護役割意識の回答パターンと関連要因 潜在クラス分析による検討
3. 学会等名 日本家族社会学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西泰子 鈴木富美子 施利平
2. 発表標題 女性の就労に関する意識変化と地域差：「日本人の意識」調査を用いて
3. 学会等名 数理社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 施利平
2. 発表標題 中国一人っ子世代の親子・親族関係
3. 学会等名 日本家族社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木富美子
2. 発表標題 夫婦を捉える計量的研究の試み：夫婦のリアリティに近づくために
3. 学会等名 日本家族社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中西泰子
2. 発表標題 高齢者介護意識にみる若年・壮年の世代間関係と性別役割
3. 学会等名 比較家族史学会65回春季研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 施利平
2. 発表標題 中国農村部の世代間関係と都市化の影響
3. 学会等名 比較家族史学会65回春季研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 施利平
2. 発表標題 中国の一人っ子世代の親子・親族関係
3. 学会等名 日本家族社会学会第29回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 第5章担当 中西泰子・第7章担当 施利平（小池誠・施利平編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 338
3. 書名 家族のなかの世代間関係	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	施 利平 (Shi Liping) (20369440)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授 (32682)	
研究 分 担 者	鈴木 富美子 (Suzuki Fumiko) (50738391)	大阪大学・国際共創大学院学位プログラム推進機構・特任助教 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関